

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### ラテン語賛歌の韻律改訂

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2003-12-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属:                 |
| URL   | <a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/822">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/822</a> |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# ラテン語賛歌の韻律改訂

東 哲 史

## はじめに

古典ラテン詩における「音節の長短」による韻律から、中世ラテン詩やロマンス諸語の詩に至る「音節の強弱」による韻律の変化については、例えば SUZUKI においてその歴史の概略が述べられている。本稿の目的は、そこにやや特殊な、しかし興味深い実例を提供しようとするものである。トレント公会議以降のグレゴリオ聖歌の改訂は旋律と歌詞の両面に涉るが、なかでも、ウルバヌス八世による、賛歌歌詞の中世的強弱の韻律から古典的長短の韻律への改変に注目してみたい。聖歌集 *Editio Medicaea* (1614-15) として世に現れた旋律の改定については論じられることが多いが、歌詞の改訂についてはそうではないように思われる。この分野で古くから定評のある APEL はこの旋律の改定については論じるものの、賛歌の歌詞本文の改定には触れず、より新しい浩瀚な HILEY は歌詞の改定については一行述べるのみで実例を供しない。

そこで本稿では、まず第1部で、長短による韻律と強弱による韻律の区別をウルバヌス八世による改訂の実例によって確認する。そのうえで、第2部において歴史的な脈を概観する。当然のことながら、ウルバヌス八世による改訂は忽然と生じた特異な事件ではない。ルネサンス開始以来の人文主義がラテン語の純化を要求しているなかで時代の要請にこたえたものであり、そこへ至るまでの過程において理解されるべきことなのである。

## 第1部

韻律の歴史と音楽史との接点はたいていごく小さなものである。本稿の主題として扱う分量がたとえば次のように一言で簡単に片付けられてしまう<sup>(1)</sup>。

in 1631 Pope Urban VIII sanctioned the rewriting of medieval, stressed hymn texts in classical metre. (HARPER, p158)

すなわち、「音節の強弱」による韻律で書かれた中世ラテン詩を、古典ラテン的な「音節の長短」による韻律で書き換えたというのであるが、本稿の目的は、いわばここに顕微鏡の焦点をあてるように拡大して、この改訂の実態を紹介することである。

他方、さすがにキリスト教典礼史の文献となるとより詳しく扱われている。

The Tridentine Breviary as it was published under St Pius V remained in use down to 1911, but during the intervening period certain changes were made in it. Many of the feasts abolished by St Pius V were reinstated in the course of the next hundred years (for example, the Presentation, St Anne, St Francis of Paula, St Anthony of Padua, St Nicholas of Tolentino). Urban VIII caused certain lessons to be corrected and instituted a number of feasts of saints, but a more serious modification was that made in the text of the hymns. A commission of four Jesuits was entrusted with the correction of the hymns of the Breviary in accordance with the rules of classical prosody. In reality they deformed the work of Christian antiquity as can be seen by comparing the hymns in their old version with those in the modern Breviary. . . . . The old versions can be found in the monastic, Carthusian, Cistercian, Dominican and Carmelite Breviaries at the present day. One of the worst examples is furnished by what was done to the hymn of the dedication Office. (SHEPPARD, p48-9)

これは、ウルバヌス八世による改訂を、むしろ「改悪」であると断罪しているが、それが一般的に見られる評言である。この改訂を好意的に評価しているものにお目にかかることはほとんどない。それでは、その「最悪の例」と言う献堂式 (Dedication of a Church) の賛歌を実例として、改訂前後の比較を簡単に行ってみる。

一つ前提となることを述べておく。この賛歌の改訂前の本文として何を用いるかということであるが、まず上にも登場したピウス五世の聖務日課書 (1568年版) を使うことが考えられる。(これは最近リプリント版が発行され利用可能になったばかりのものである。) しかし、1568年版の本文を現在の段階で典礼や歌唱に使用することはまずあるまいと思われる。またそれ以外に、文献学的に原型 (八世紀頃と推定される) を提示したものもあるが、やはり今日の時点で参照が容易で使用されることが多いものを取り上げるのがより有益であろうから、ソレーム版の *Liber hymnarius* (及び *Antiphonale monasticum*) にある本文を取り上げる。また改訂後の本文としては、これも実用を考えて、*Liber usualis* にあるものを使用する。

前半部

/ - / - / - / -  
 URbs Ie-rú-sa-lem be-á-ta,  
 / - / - / - / -  
 quæ constrú-i-tur in cæ-lis  
 / - / - / - / -  
 an-ge-lís-que co-roná-ta,  
 / - / - / - / -  
 Nova véni-ens e cæ-lo,  
 / - / - / - / -  
 præpa-ráta, ut intác-ta  
 - / - - / - / -  
 Pla-té-æ et mu-ri e-ius

/ - / - / - / -  
 dicta pa-cis vi-si-o,  
 / - / - / - / -  
 vi-vis ex la-pí-di-bus,  
 / - / - / - / -  
 sicut sponsa có-mi-te.  
 / - / - / - / -  
 nupti-á-li thá-lamo  
 / - / - / - / -  
 copu-lé-tur Dó-mino.  
 - / - - / - / -  
 ex auro pu-rís-si-mo;

(以下略)

後半部

/ - / - / - / -  
 ANgu-lá-ris fundaméntum  
 / - / - / - / -  
 qui pa-rí-e-tum compá-ge  
 - / - / - - / -  
 quem Si-on sancta suscé-pit,

/ - / - / - / -  
 la-pis Christus mis-sus est,  
 / - / - / - / -  
 in utróque nécti-tur,  
 / - / - / - / -  
 in quo credens pérmanet.

(以下略)

(アクセントのある音節を / によって、他の音節を - によって示した。) この賛歌は強弱4歩格の、最後に音節を一つ欠くパターンである。(trochaic tetrameter catalectic) 従って各行15音節である。音節の強弱によって組織づけられていることは明らかであろう。ごく一部を除き、「強 - 弱」がきれいに並んでいる。

前半部

CAeléstis urbs Je-rúsa-lem,  
 Quae célsa de vivéntibus  
 Sponsaé-que rí-tu cínge-ris  
 O sórte núpta próspéra,

Be-áta pá-cis ví-si-o,  
 Sáxis ad ástra tólle-ris,  
 Mílle Ange-ló-rum míllibus.  
 Do-tá-ta Pátris gló-ri-a,

|   |   |
|---|---|
| Respérsa Spónsi grá-ti-a,<br>Chrísto jugá-ta Príncipi,<br>後半部                       | Regína formo-síssima,<br>Caéli corúsca cí-vi-tas. (以下略)                                   |
| Alto ex Olýmpi vérti-ce<br>Ceu mónte de-séctus lápis<br>Dómus supérnae, et ínfimae, | Súmmi Pa-réntis Fí-li-us,<br>Térras in ímas dé-ci-dens,<br>Utrúmque júnxit ángulum. (以下略) |

#### 改訂版の訳

##### 前半部

|              |              |
|--------------|--------------|
| 神々しき都 エルサレムよ | 幸福なる平和の鑑よ    |
| 生ける石にて築かれ    | 高く空まで聳え立ち    |
| あたかも花嫁の如く    | 幾千もの天使に取り巻かれ |
| 前途に栄えある花嫁よ   | 御父の栄光に恵まれ    |
| 花婿の恩恵に飾られ    | いとも麗しき女王     |
| 王たるキリストに嫁ぎし  | 天の輝ける都よ      |

##### 後半部

|               |              |
|---------------|--------------|
| オリンポスの高き頂から   | 大いなる御父の御子来れり |
| 山より切り離されし岩の如く | 地上にまで身を落とし   |
| 天上の家と地上の家を    | 礎石を一にして結び給いき |

(「生ける石」や「花嫁」といった理解しにくいイメージが並んでいるが、源泉としてはとりあえずヨハネ黙示録21,9～, 1ペテロ2,4～を参照していただきたい。さらに詳しい解釈が必要とされる場合は、以下に挙げる参考文献をあたられたい。)

この賛歌は短長2歩格 (iambic dimeter) で各行8音節であるが、便宜上、本来の2行を1行にして表示してある。一見して、単語アクセントの規則性によって組織づけられてはいないことが明らかであろう。例えば、各行の冒頭を取り出してみると、CAeléstis, Be-áta, Sponsaé-queなどは「弱 - 強」で始まっているのに、Sáxis, Mílle, Caéliのように「強 - 弱」で始まっているものがある。これは、音節の強弱ではなく古典ラテンの音節の長短に従い、「短 - 長」の韻律で作られた賛歌なのである。

この古典的韻律についてここで詳しく述べる余裕はないので、その方面の文献を参照していただきたいが、最低限必要なことを挙げておく。この賛歌は原則的には「短 - 長」の連続で形作られるが、単音節は長音節で置き換えられ得る。但し、最後のカデンツァは「長 - 短 - 長」とする。故に、ラテン語の単語アクセントの規則 (Paenultima Law) により、アクセントは最後から三番目の音節に置かれることになる。上の例の各行末をみると、Je-rúsa-lem, ví-si-o, vivéntibusのように規則的なカデンツァになっていることが分かる (一箇所、音節が

一つ欠けている行末 *lapis* を除く)。しかし、これは、「音節の長短をそろえた結果として」行末の単語アクセントが一定のパターンになったのだ、とここでは考えていただきたい。

なお、語末のイタリック体 (*Mille, Alto, supérnae*) は母音融合 (*synaloepha*) を示す。すると、韻律に即して切り分ければこのようになる。

Míl - leAn - ge - ló - rum - míl - li - bus.

すなわち、*le* と *An* を、二つではなく一つの音節とみなすことになる。(賛歌歌詞におけるイタリック体の使用について、グレゴリオ聖歌学の立場からの説明は LAROCHE, p314f<sup>(3)</sup> にみられる。つまり、ここに二つの音符をあてるかそれとも一つにするか、という議論である。)

先ほども述べたように、この改訂は酷評されるのが常であるが、特にこの賛歌についてはそうである。多くの評言から大方の意見を平均すると、次の Trench 僧正のものになるといってよいであろう。(この聖職者は、かの *Oxford English Dictionary* の編纂開始にあたって中心的な役割を果たした人物として言語学史上にも名をとどめている。)

This rugged but fine old hymn, of which the author is not known, is probably of date as early as the eighth or ninth century . . . . . if we compare the first two rugged and somewhat uncouth stanzas, but withal so sweet, with the smooth iambics which in the Roman Breviary have taken their place, we shall feel how large a part of their beauty has disappeared. (TRENCH, p311)

他の意見もざっと見ておこう。

イエズス会士 Clemens Blume は、上記 Trench の意見を引用しながら、「改訂版には、オリジナルの素晴らしさが殆ど残されていない。」(BLUME, 1908, p110ff) と述べ、さらに「原テキストはいわゆる“改訂者”どもによってあまりにも改変されてしまった」「原テキストが表現する“天上からの降臨”の美しさに、改訂版は及ばない」(BLUME, 1932, p215ff) としている。

In the revised Roman Brev(iary), 1632, it is recast, very much to its disadvantage, as follows: *Coelestis urbs Jerusalem*, . . . . . (JULIAN, p1199)

The hymn was rewritten in smooth but comparatively weak iambic dimeters for the modern Roman breviary, beginning thus : *Caelestis urbs Jer-*

usalem, ..... Contrast the strength of the line (*Angularis fundamentum*) with  
*Alto ex Olympi uertice* ..... (WALPOLE, p377ff)

確かに、突然この「オリンポス」という異教的概念を使うところは特に評判が悪いのだが、これについてはまた後で触れる。

Hymnologists, Catholic and non-Catholic alike, criticise adversely the work of the correctors in general. Of this hymn in particular some think that, whereas it did not suffer as much as some others, yet it lost much of its beauty in the revision; others declare that it was admirably transformed without unduly modifying the sense.<sup>(4)</sup>

(*The Catholic Encyclopedia*, “Urbs beata Jerusalem dicta pacis visio”)

## 第2部

さて、ここで視野を拡大して、このような改訂に至るまでの歴史的経緯にも目を向けなければならぬ<sup>(5)</sup>。上でその一部を紹介したウルバヌス八世らによる改訂は、当然のことながら最初のものではない。賛歌改訂への第一歩は古来の賛歌への注釈書という形で現れた。すでに Jakob Wimpfeling (1450 - 1528) は1494年に注釈つき賛歌集を印刷公刊している。かれは賛歌歌詞に注意深く手を加えているが、それは古典ラテンの平仄に合わぬ barbarism を取り除くことによって、賛歌本来の姿を再現できると信じたからであって、実際に彼の作業は、現代の古典学者による本文校訂に通じるところがある。さらに Josse Clichtove (Jodocus Clichtovaeus, 1472 - 1543) の注釈書 *Elucidatorium ecclesiasticum* (1516) も挙げねばならない。Clichtove も古典ラテンの韻律に合わせて賛歌に手を加えている。また刊行以来その影響は非常に大きく、20世紀に入ってからでも WALPOLE などが通釈に利用している。後で引用する、イエズス会士 Strada からウルバヌス八世にあてた手紙にも引用されている。

しかし、賛歌の改変は単に韻律の手直し程度で済むはずもなかった。人文主義者たちによる、古典的でないラテン語を排斥する圧力は十五世紀末には始まっているのである。彼らの中には、正しい古典ラテン語の感覚を狂わせぬようにするために、典礼ではラテン語を使うのはやめて、ギリシア語とヘブライ語を使うべきと主張するものまであった。Pietro Bembo (1470-1547) は当時のイタリアの文人中で最も尊敬されていた人物であるが、弟に対して、「崩れたラテン語を身につけぬようにするために」ヴルガータ聖書を読まぬよう忠告したという。(NUNN, p5.) Bembo 自身は少時にギリシア人 Lascaris に就いて研鑽したのでギリシア語の読解力はあっただろう。しかし当時の状況で(エラスムスのギリシア語聖書の公刊がようやく1516年である)「ラテン語聖書は読むな」というのは要するに「聖書は読むな」というに

等しいと思われるが、それでも Bembo 兄弟は共に枢機卿にまで上り詰めたのである。まことに古典主義の時代ではあった<sup>(6)</sup>。

その極点が、キケロの文辞をひたすら模倣する「キケロ主義 (Ciceronism)」である。このような傾向に対する反発は当時から既にあった。エラスムスは『キケロ主義者 (Ciceronianus)』(1528) を著して、実に彼らしいやり方で「キケロの奴隷たち」を皮肉った。登場人物の一人は、キケロ語彙集とでもいうべき大冊を手元から離さず、「その形容詞の比較級はキケロに用例がないから使用してはならない」などとのたまうのである。(SAITO, p151f)

ホイジンガによると、(HUIZINGA, p205f)

『キケロ主義者』の核心は、あまりに熱心な古典主義がキリスト教信仰にとって危険であることを指摘しているところにある。(中略) キケロ主義者の莫迦らしさの証拠として、彼は教義上の文章を古典ラテン語に翻訳したものをあげている。すなわち、〈永遠の父の言葉また子なるイエス・キリストは予言者たちのあかしに従ってこの世にきた〉という代りに、ラテン語ではこうなる。〈至善至大のユピテルの仲介者にして子、救世者、王なる者、予言にしたがって、オリンポスより地上に舞いおりた。Optimi maximique Jovis interpres ac filius, servator, rex, juxta vatum responsa, ex Olympo devolavit in terras.〉たいていの人文主義者は本当にこんな文体で書いていた。

これを典礼聖歌にまで持ち込むと先ほど見たばかりの「オリンポスの高き頂から」“Alto ex Olympi vertice” になるという訳である。

そして、賛歌の単なる改訂というだけではすまぬ革命的なものが現れる。イタリア人 Zacharia Ferreri による賛歌集 (1525) である。これは全く新たに作られたもので、その内容は BÄUMER が詳しく紹介しているが、非常に興味深い、というよりも正直に言って面白いものである。ごく一部を紹介すると：

|       |  |
|-------|--|
| 三位一体  | triforme numen Olympi 「オリンポスの三重の神威」          |
| 聖母マリア | nympha candidissima 「いとも清らかなるニンフ」            |
| 聖母マリア | dearum maxima 「女神たち (複数!) のうちで最大なるもの」        |
| 神     | deorum maximus rector 「神々 (複数!) のうちで最大なる支配者」 |

ただ「革命」は長くは続かず、10年も経たぬうちにこの賛歌集は打ち捨てられてしまった。それ故、この書は大変な希覯本となっている。それ以降は、Quiñones による聖務日課書 (1535) や、現代までの聖務日課書の原型となった1568年の *Breviarium romanum - Editio princeps* なども賛歌を古来の形に戻している。その後、ウルバヌス八世の改訂に至るまで賛歌について述べるべきことは少ない。ただ、クレメンス八世による聖務日課書の改訂版



(1602) についてのみ一言述べておく。(BÄUMER, p273f; BATIFFOL, p323ff) 改訂委員であった枢機卿 Silvio Antoniano (1540~1603)<sup>(7)</sup> は抜本的な賛歌の改訂を提案したらしいが、実際には少々の手直しにとどまった。母音か子音を一つ、あるいは音節一つを調節して韻律を合わせようとした。特にプルデンティウスとアンブロシウスの作になる賛歌については韻律の誤りは本来あるはずがないと思われていたので、彼らは、それが写字生の誤りを正し原型を再現することだと信じていたのである。この際に二つの賛歌が付け加えられた。Antoniano 自身の作である “Fortem virili pectore” (*Liber hymnarius*, p322; *Liber usualis*, p1234) と、同じく改訂委員の枢機卿 Roberto Bellarmino (1542~1621) の作 “Pater superni luminis” (*Liber usualis*, p1565) である。

さて、本題のウルバヌス八世による改訂であるが、それに対する典型的な評価を以下に示す。ほとんど罵倒に近い言辭である。

Urban VIII, being himself Humanist, and no mean poet, as witness the hymns of St. Martin and of St. Elizabeth of Portugal, which are of his own composition, desired that the Breviary hymns which it must be admitted are sometimes trivial in style and irregular in their prosody, should be corrected according to grammatical rules and put into true metre. To this end he called in the aid of certain Jesuits of distinguished literary attainments. The corrections made by these purists were so numerous – 952 in all – as to make a profound alteration in the character of some of the hymns. Although some of them without doubt gained in literary style, nevertheless, to the regret of many, they also lost something of their old charm of simplicity and fervour. At the present date, this revision is condemned, out of respect for ancient texts; and surprise may be expressed at the temerity that dared to meddle with the Latinity of a Prudentius, a Sedulius, a Sidonius Apollinaris, a Venantius Fortunatus, an Ambrose, a Paulinus of Aquileia, which, though perhaps lacking the purity of the Golden Age, has, nevertheless, its own peculiar charm. Even the more barbarous Latinity of a Rhabanus Maurus is not without its archaic interest and value. (*The Catholic Encyclopedia*, “Breviary”)<sup>(8)</sup>

ウルバヌスは改訂にあたって四人のイエズス会士を委員に任命した。すなわち Matthias Casimir Sarbiewski (1595~1640), Famiano Strada (1572~1649), Tarquinio Galluzzi (1574~1649), Girolamo Petrucci (1585~1669) だが、Sarbiewski 以外はすべてイタリア人である。改訂の内容はといえば、全く手を加えられなかった賛歌もあり、単語一つ音節一つ程

度の手直しもあり、上で見たような根本的な書き直しもあり、さまざまである。改定前後の比較は *Liber usualis* や *Liber hymnarius* によればある程度は可能であるから、ここでは、当時の文人階級の一員でもあったこれらのイエズス会士が教会以外のところではどのようなものを作っていたのか見ることにする。取り上げるのは、その流麗なラテン詩によってポーランドのホラティウスとたたえられた Sarbiewski である。イエズス会士 Mertz の英訳<sup>(9)</sup>を紹介する：“At leisure, the author declares war on the vices of his day.” Content I go my way and leave all else to the miserable // mob — let the chips fall as they may! // I am blissfully ignorant of all talk of advance in glory, // of praise I have won, and unmindful of any noised abroad. // I am safer in my own room with locked doors. // But to prevent idle talk from making me an object of blame, // I have fully determined to live publicly in the eye of all, // and have made my promise to Minerva, like a soldier, // but without war’s effects.// I’m always ready to fight the battle for truth, // and smash all pretense and idleness (以下略)

カトリックの高位聖職者が「ミネルヴァの神に誓う（ラテン語原文は *Dixi sacramentum Minervae*）」というのは尋常ではないように思える。これは異教的といわんよりはむしろ異教そのものであるが、イエズス会士 Sarbiewski はもう完全に古代ローマの文人仲間になりきっているのであろう。典雅な詩文の遊びとはいえ、こんなことも許されているのである。典礼賛歌で「オリンポス」というくらいどうということはあるまい。

次に改訂作業の細部を示す資料をみてみよう。改訂委員の Strada からウルバヌス八世へあてた手紙をごく一部であるが紹介する<sup>(10)</sup>。

#### 教皇聖下

聖下におかれましては、聖下御自身の高貴かつ博雅なるその御手を加えられました賛歌について、私めの意見を述べよ、と仰せられましたので、ここに申し上げる次第でございます。実にこの手直しは緊要と思われるものでございまして、稀に見る典雅を以ってなさっておられます。しかし、二三の難点が私めには見うけられましたので、聖下の深遠なる学識に対するに相応しいこの謙譲を以って、それを申し上げます。(中略)

次の賛歌におきましては：

*O lux beata Trinitas Et principalis unitas etc.* (*Liber hymnarius*, p215f)

聖下はこのように改良なさいました：

*Iam sol recedit igneus Tu lux perennis unitas etc.* (*Liber usualis*, p312f)

Jodocus Clichtovaeus はその著 *Elucidatorium ecclesiasticum* のなかでこの “principalis unitas” について大変意味ありげにこのように語っておるのであります：“principalis unitas” と言われるのは …… (略)” “principalis” という言葉はしばしば良き著作

家におきましても同様な意味で、例えば“*principalis Maiestas*”のような形で見出されるのであります。従いまして、このままでもよさそうでありまして、何よりもまず作者である聖グレゴリウスに敬意を払うためにも、聖下御自身で、変えぬ方がよくはないか御判断いただきたいと存じます。(中略)

(筆者注：この賛歌は Strada の要請もむなしくウルバヌス案のように改変されてしまった。ウルバヌスが聖グレゴリウスへの敬意を欠いていたとは言えない。)

次の聖母マリアの賛歌におきましては：

1. Memento salutis auctor
2. Quod nostri quondam corporis
3. Ex illibata Virgine
4. Nascendo formam sumpseris

聖下はこのように改良なさいました：

1. Salutis auctor sis memor
2. Nostri quod artus corporis
3. acrata ab alvo Virginis
4. Nascendo in orbe sumpseris

この一節は降誕祭の賛歌“*Christe redemptor omnium*”から取られたものであり、聖アンブロシウスの作でありますから、彼へ敬意を払うためにも出来ることなら変えずにおきたいと思うのでありますが、私めは次のようなものを思いつきました：

1. Salutis auctor auspice
2. Nostri quod olim corporis
3. De vergine integerrima
4. Nascendo formam sumpseris (中略)

(筆者注：これは、処女聖マリアの小聖務日課で使われる賛歌であるが、残念ながらこの改訂された形は *Liber usualis* には載っていない。故に *Breviarium romanum* (1946) によってその形をしめすと：1行目 *Meménto, rerum Cónditor*；2行目 Strada 案；3行目ウルバヌス案；4行目 Strada 案となる。これは継ぎはぎ細工といわれても仕方あるまい。改訂前の形については *Antiphonale monasticum*, p238；*Liber hymnarius*, p214f を参照。)

以上をもちまして、聖下の尊前にひれ伏しおみ足に口づけいたします。

Famiano Strada.

「おみ足」やら「口づけ」やらという修辞はともかくとして、気性の激しいことで知られたこの教皇を相手に真摯な議論をしているということは分かる。教皇の案よりも自分の案のほうが良いと思う、とはっきり言い切っている個所が他にいくつもある。また、原型をなるべく尊重すべく努力している点にも注意すべきであろう。この手紙に限らず、BÄUMER の資料にも当時のそのような態度をしめす証拠がいくつもある。それを無視して、原型の再現を旨とする現代の賛歌研究者たちが「改訂者たちは古代教父の遺産に全く敬意を払わなかった」と切っ

て捨てるのは公正を欠いていると思える。当時は「韻律の誤りを正すことが原型を再現することに通じる」という考えもあったことは既に述べた。それに彼らにとって崩れた野蛮なラテン語で典礼をおこなうことはむしろ冒瀆的であり、それを直すことが正しい典礼のあり方だと思われていたのである。確かに「彼らは教会ラテン語にもそれ自体の整合性があることを全く理解していなかった」(LUEGER, p57) と言えるかもしれない。特に、音節の強弱による韻律については理解していなかったであろう。トマス・アキナスの作になる賛歌 “Pange lingua” “Verbum supernum” などは「エトルリアのリズムで作られた」(etrusco rhythmo compositi) と思いこんでいた改訂者がいたというのだから。(BÄUMER, p290f) これは瞠目に値する珍説である。当時、まともなエトルリア学があったわけではないから、古来から存在するものでありながら古典ラテンの規範で説明できぬものは何でもかんでもエトルリアにしてしまった、というところであろう。しかし、古人の知識の不足を理由にしてそれを咎め非難すべきであろうか。

今世紀初頭に活躍した賛歌学者・イエズス会士 Clemens Blume は次のようにこれら諸改訂を非難した。

The Humanists abominated the rhythmical poetry of the Middle Ages from an exaggerated enthusiasm for ancient classical forms and metres. Hymnody then received its death blow as, on the revision of the Breviary under Pope Urban VIII, the medieval rhythmical hymns were forced into more classical forms by means of so-called corrections. (*The Catholic Encyclopedia* “Hymnody”)

そしてこの判定は “Hymns and Hymnals” in *New Catholic Encyclopedia*, 1967- でそのまま繰り返されている。このような見解に抗してウルバヌス八世の改訂を弁護した多少なりとも反論らしきものは、筆者の見る限り、次の IJsewijn くらいのものである。(Jozef IJsewijn は人文主義以降のラテン語文学研究 Neo-Latin studies の第一人者と目される人物である。)

However, to do these men historical justice, one should remember that to a humanist steeped in Horace, medieval versification sounds like primitive doggerel. Moreover, between the ideals set to them, this committee did its job with good taste and often fine results.(IJSEWIJN, p63)

(本学講師＝イタリア語担当)

## 注

- (1) あるいは de VALOIS, p66. 「ルネサンス期に、もっぱら韻律的な観点で (dans un sens uniquement métrique) 賛歌の歌詞を改訂せよという、あるいは作り直せとまでいう要求がたかまり、ついに1631年、ウルバヌス八世は自身と四人のイエズス会士からなる委員会によって定められた歌詞を教会に課するに至った。(伝統のある修道会はそれぞれの版を維持したが。) この改訂版は現在でも使用されているが、惨憺たる結果に (désastreux) なっているところがある。」
- (2) この賛歌の前半部と後半部は一日の典礼の中で別に歌われる。改訂前の賛歌の訳を望まれる方はソレームの仏語対訳版 *Hymnaire latin-français*, 1988などを参照されたい。

SHEPPARD で見たように、ソレームなどの修道院用聖務日課書には古来からの形が受け継がれているのであるが、WALPOLE, BLUME, JULIAN などによって示されている文献学的な立場による形とは僅かに異なっている。例えば、この三者の示す形はいずれも “Urbs beata Jerusalem” であるが、ソレーム版では本文中に書いたように “Urbs Jerusalem beata” である。また、WALPOLE 等が再構成した形も (これは当然のことながら) 三者とも一様ではない。さらに、同じくソレーム版とはいえ *Antiphonale monasticum* にある形と *Liber hymnarius* の形とではやはり僅かな差がある。このあたりの経緯については、以下に述べる疑問点と共にグレゴリオ聖歌学の専門家の御教示をお待ちしたい。

以下に、1568年版聖務日課書の形と、WALPOLE による形を、本文中で使用した *Liber hymnarius* と異なる行のみ挙げておく (一部に表記のみ改めた個所がある)。

*Breviarium romanum* (1568)

Urbs beata Hierusalem, Dicta pacis visio,  
Et angelis coronata, Ut sponsata comite,  
Qui compage parietum In utroque nectitur,

WALPOLE, p377ff.

Urbs beata Ierusalem, dicta pacis visio,  
et angelis coornata ut sponsata comite,  
qui conpage parietis in utroque nectitur,

アクセント解釈について二つ述べておく。まず1行目の “Urbs beata Ierusalem” であるが、これはやはり /—/—/—/— と解釈される。つまり、Ié-ru-sá-lem というアクセントになる。(BLUME, 1932, p218) それに対して本文中で取り上げたソレーム版の解釈では Ie-rú-sa-lém となっており、教会ラテン語の教科書・辞書でも Ierúsalem とアクセントを付す。しかし、Iérusálem というアクセントの例もあるということについては NORBERG, 1985, p15f. を参照されたい。“En réalté l’accentuation des noms hébreux était libre.” (ギリシア語を経由してラテン語に入った形もあるが、それには Hierosólyma とアクセントを付するのが普通である。) 次に、引用部分の最終行 “quem Sion” であるが、このアクセント解釈については恐縮ながら確信が持てない。通常は Si-on というアクセントであるが、Si-ón という例もあることは上記 NORBERG によって指摘されている。いずれにせよ Si-on の解釈にかかわらずこの行は「強 - 弱」のパターンには当てはまらぬことになる。この賛歌の韻律については NORBERG, 1958の p119前後を参照。

- (3) “Les syllabes hypermétriques sont imprimées en caractères italiques dans les livres de chœur.”

岳野訳では第三章第三節「賛歌における音節の省略」が相当する。

- (4) この改訂版 “Caelestis urbs” に多少なりとも肯定的評価を与えているのは筆者が見た限りでは次のものくらいである。“The later versions, as in the Breviarium Romanum, polish it up a good deal.” (MARCH, p313) しかしこれは題名からも察せられる通り、文法的解説を旨とする書であるから、その評言にはあまり重きを置くべきでもない。(実際、オリジナルの本文に通釈をつけるのみで、改訂版の本文は載せていないのである。)
- (5) 以下の記述は主に、BÄUMER, BATIFFOL, MOSS, SODI & TRIACCA に負う。特に BÄUMER によるところが大きい。BATIFFOL, SODI & TRIACCA は BÄUMER の記述をほとんどそのまま繰り返しているところがある。この浩瀚な研究書が100年前から今まで変わらず基礎資料となっていることがよく分かる。
- (6) このあたりの状況については BURCKHARDT, ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』が巧みに伝えてくれる。柴田訳では「第三章—古代の復活」, 中でも特に「教養の一般的なラテン化」を参照されたい。
- (7) *Liber hymnarius* は Antoniano の没年を1608としているようであるが、他の資料はみな1603とする。
- (8) 詩人には程遠いというウルバヌス八世に帰せられる賛歌 “Martinae celebri plaudite nomini” “Domare cordis impetus Elisabeth” は20世紀の聖務日課書にも収録されているのだが、残念ながら *Liber usualis* などには見られない。(なお、引用文中に St. Martin となっているのは St. Martina の誤りであろう。) 彼の作は “Haec est dies” “Regis superni” が *Liber hymnarius* に収録されている。
- (9) MERTZ & MURPHY, p15, Book 2, Ode 10, from *Poemata Omnia*, Stara Wies, 1892.
- (10) BATIFFOL, p350ff. 各賛歌の作者については、現代では認められぬ考えをしているところもあるが、それはいちいち取り上げない。

## 文献表

英語文献からの引用は訳さずに本文中にそのまま用いてある。日本語訳が存在する場合は大いに利用させていただいた。但し、訳は必ずしもそのままにはなっていない。文献の探索については東京音楽大学付属図書館の方々に絶大な援助を賜った。心よりお礼申し上げる。なお CONNELLY は本文中には言及していないが、参考にすることが多かったので挙げておく。

- Antiphonale monasticum pro diurnis horis*, Desclée, Paris - Tournai - Roma, 1934.
- APEL, Willi, *Gregorian Chant*, Indiana Univ. Press, Bloomington - London, 1958.
- BATIFFOL, Pierre, *Histoire du bréviaire roman*, 3e éd., Picard & Lecoffre, Paris, 1911.
- BÄUMER, Suitbert, *Histoire du bréviaire*, trad. BIRON, Réginald, vol. II, Letouzey et Ané, Paris, 1905.
- BLUME, Clemens, *Unsere liturgischen Lieder*, Pustet, Regensburg, 1932.
- BLUME, Clemens, *Analecta Hymnica*, Band 51, O. R. Reiland, Leipzig, 1908.
- Breviarium romanum - Editio princeps* (1568), Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano, 1999 (reprint)
- Breviarium romanum* (1946), Benzinger Brothers, Boston, etc., 1946.
- BURCKHARDT, Jacob. *Die Kultur der Renaissance in Italien*, Phaidon, Essen, s.d. (ブルクハルト著 柴田治三郎訳『イタリア・ルネサンスの文化』中央公論社 1987.)
- The Catholic Encyclopedia*, The Catholic Encyclopedia Press, N.Y., 1914-.
- CONNELLY, *Hymns of the Roman Liturgy*, Longmans, Green & Co., London, etc., 1957.
- de VALOIS, Jean, *Le chant grégorien*, Presses Univ. de France, Paris, 1963. (ジャン・ド・ヴァロワ著 水島良雄訳『グレゴリオ聖歌』白水社 東京 1999.)

- HARPER, John, *The Forms and Orders of Western Liturgy from the Tenth to the Eighteenth Century*, Oxford Univ. Press, Oxford - N.Y., 1991. (J. ハーパー著 佐々木勉・那須輝彦訳『中世キリスト教の典礼と音楽』教文館 東京 2000.)
- HILEY, David, *Western Plainchant*, Oxford Univ. Press, Oxford - N.Y., 1993.
- HUIZINGA, Johan, *Erasmus, Deutsch von Werner Kaegi*, Benno Schwabe, Basel, 1936. (ホイジンガ著 宮崎信彦訳『エラスムス』筑摩書房 東京 2001.)
- IJSEWIJN, Jozef, *Companion to Neo - Latin Studies*, Part 1, Leuven Univ. Press & Peeters Press, Leuvan, 1990.
- JULIAN, John, editor, *A Dictionary of Hymnology*, 2nd ed., Dover Publications, N.Y. 1957 reprint (1907)
- LAROCHE, Th., *Principes traditionnels d'exécution du chant grégorien d'après l'école de Solesmes*. Desclée, Paris - Tournai - Roma, 1929. (テ・ラローシュ著 岳野慶作訳『ソレム学派によるグレゴリオ聖歌の歌い方』音楽之友社 東京 1990.)
- Liber hymnarius*, Abbaye Saint-Pierre de Solesmes, Solesmes, 1983.
- Liber usualis*, Desclée, Paris - Tournai - Roma, 1939.
- LUEGER, Wilhelm "Die gottesdienstliche Feier" in Karl Gustav Feller, editor, *Geschichte der katholischen Kirchenmusik*, Band I, Bärenreiter, Kassel, etc., 1972.
- MARCH, F. A., *Latin Hymns, with English notes. For use in schools and colleges*, American Book Company, N.Y. - Cincinnati - Chicago, 1874.
- MERTZ, James J. & MURPHY, John P. (in collaboration with Jozef IJsewijn), *Jesuit Latin Poets of the 17th and 18th Centuries*, Bolchazy-Carducci, Wauconda, Illinois, 1989.
- MOSS, Ann, "The Counter - Reformation Latin Hymn", in McFARLANE, I.D. editor, *Acta Conventus Neo - Latini Sanctandreami : proceedings of the Fifth International Congress of Neo - Latin Studies : St. Andrews, 24 August to 1 September 1982*, Center for Medieval and Early Renaissance Studies, University Center at Binghamton, N.Y., 1986.
- New Catholic Encyclopedia*, The Catholic University of America, Washington D. C., 1967-.
- NORBERG, Dag, *L'introduction à l'étude de la versification latine médiévale*, Almqvist & Wiksell, Stockholm, 1958.
- NORBERG, Dag, *L'accentuation des mots dans le vers latin du Moyen Age*, Almqvist & Wiksell, Stockholm, 1985.
- NUNN, H. P. V., *An Introduction to the Study of Ecclesiastical Latin*, Cambridge Univ. Press, London, 1922.
- SAITO, Bishu, 齋藤美洲著『エラスムス』清水書院 東京 1981.
- SHEPPARD, Lancelot, *The Liturgical Books*, Hawthorn Books, N.Y., 1962.
- SODI, Manlio & TRIACCA, Achille Maria, "Introduzione" in *Breviarium romanum*, 1999, cit.
- SUZUKI, Shingo, 鈴木信五「ロマンス語とロマンス詩の誕生 - フランスとイタリアの場合を中心に」 in 丸山圭介編『東京音楽大学・公開自主ゼミナール「音楽のことば」II 講義録 1996.
- TRENCH, Richard Chenevix, *Sacred Latin Poetry*, 2nd ed., Macmillan, London - Cambridge, 1864.
- WALPOLE, A. S. *Early Latin Hymns*, Georg Olms, Hildesheim, 1966 reprint (1922)